



# 光受寺通信

R.4年5月1日 発行  
発行元 光受寺  
https://koujyuji.com/

「終活」。この言葉が話題になり始めてしばらく経つが、70歳を過ぎ後期高齢者にもなると、やたら現実味を帯びた言葉として、胸に迫ってくるものがある。「終活」とは「終末活動」ということなのだろうが、はたして何をどうすることが「終活」なのかと思いを巡らすことである。

納棺体験してみて己の死を想像してみるといったことや、身の回りの身辺整理、いわゆる「断捨離」をするということが思いあたる。一般的には後者の方が多いと思われるのだが、具体的に何をどうするのかは人それぞれであろう。

私が最近よく耳にすることと言えば、墓じまいや、仏壇じまいということがある。確かに跡継ぎがおられない方は深刻な問題となるし、たとえあってとしても子供に迷惑をかけたくない思いから自分が生きているうちに何とか始末しておこうと思われることも当然の事ではあろう。しかし反面、本当にそれで心がすっきりとして、心置きなくこの世を去っていけるものなのだろうかとも思われてくる。使わなくなった家財道具や衣類を処分するのはどこか違うのではないだろうか。

今まで生きる意味を尋ね、心の支えとして手を合わせてきた仏壇や墓は、死んだら無くなっても良い物であったのだろうか。私たちは次世代への相続として仏壇や墓は本当に必要のない物だったのだろうか。かつて、次男、三男が別れ家を出した折には、親が何よりも第一に仏壇を持たせたということは、親のどんな思いが込められていたのだろうか。

## 日本の基礎を築いた聖徳太子

M・M

日本に仏教が入ったのは欽明天皇の御代、西暦五五二と言われます。その二百年後には、奈良に東大寺が建立され盧舎那仏の開眼供養が営まれて、仏教は定着しました。その背後には、優れた指導者として今も尊敬される聖徳太子の功績があります。

親鸞聖人は晩年に沢山の和讃を残されましたが、その中に「皇太子聖徳奉讃」と題して十一首の和讃が遺されています。その一首に「和国の教主聖徳王 広大恩徳謝しがたし一心に帰命したてまつり 奉讃不退ならしめよ」があります。親鸞聖人が若い頃、参籠された京都六角堂は聖徳太子の創建になるもので、示現にあずかる経験もあって、このほか尊崇の念は深かったと思われる。六角堂が機縁となり、法然上人に師事することができました。

聖徳太子は、政治・学問の面では、現代につながる国家の基礎を築かれました。二十歳のとき推古天皇のもとで摂政となり十七条憲法、冠位十二階を定められました。600年以降五回にわたって遣隋使を送り、当時、隋だった中国の文化制度を取り込むことで、氏性制度を改め、律令国家の建設を目指しました。憲法十七条、冠位十二階はその基礎となるものです。また仏教精神・思想の普及につとめました。「三経義疏」は法華経・勝鬘経・維摩経を統括したのですが、和の心、怒りの抑制を説きました。こうして古代国家ながら、明晰な頭脳と思考をもって、現代につながる国家体制の基礎を築かれたのです。

私どもは、先祖に聖徳太子のような偉大な先祖をもつことを誇りに思い、日本国民として一層の自覚を深めたいものです。



本堂北余間に七高僧と聖徳太子のご絵像がおかけしてあります。

このご絵像には、次のような讃仰が4行に書かれています。

『聖徳太子廟窟偈』聖典 1005

大慈大悲本誓願  
愍念衆生如一子  
是故方便從西方  
誕生片興正法

阿弥陀仏の慈悲は親が一人の子を愛おしむように、すべての人に降り注がれる。正しい仏法を起すようと、阿弥陀仏は西方浄土から日本の国に生まれた。

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年協賛法要

教区団体参拝募集 第一期法要 (令和五年二月二十五日(土)～)

令和五年四月八日(土)まで 「十五日間」

この度見出しの件につきまして岐阜教区第十一組において団体参拝をいたすことになりました。期日等につきましては次の通りです。

期 日 令和五年三月二十五日(土) 午後5～

募集人員 第十一組全体で九十名 (各寺への割り当ては改め)

交通手段 バス

集合時間・集合場所・費用等については未定。

ご希望の方は、あらかじめ、住職までお知らせください。  
詳細につきましては改めてお知らせいたします。



今月の掲示板

あなたが過ぎた

今日一日は

きのうより変わった人が、

あれほど生きたいと

願った一日。

作者?

それ、秋も去り春も去りて、年月をおくること、昨日も過ぎ今日もすすむ。このまじかには年暮のしせむらゝとひおぼえず、しつゝひひらき。云々(御又4帖の通)

私たちはこんな感じで毎日を過ごしているのが、常ではないでしょうか。

何となく過ぎ、何となく暮れていく毎日の連続が何となく不安ではあるのですが、しかしやはり何となく過してしまっています。こんな人生が最期のその日まで続いていくのか、さうか。遠くのことのないの一時一時の大切さに気づいた時、私たちは本当の人生の意味に出会うことができないのでしょうか。

新「一」

十二回連載 樹林

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ  
南無阿弥陀仏 「人と生まれたことの意味をたずねていく」  
— 問い続ける歩みをもつて —

2回目



こころの散歩

妙 好 人 樹 林

「オーヤ、どこにおる、お浄土もろうつて娑婆におる」これは島根県温泉津(ゆのつ)の妙好人、浅原オーの言葉です。江戸時代から現在まで妙好人は大勢輩出しておりますが、すべてが浄土真宗の篤信者です。どの妙好人も、研ぎ澄ました感性の持ち主でした。

香川県の妙好人「庄松」は、字は読めませんでした。あるとき法話の席で、「今日の説教の有難いこと、おかげで邪見の角が折れました」と言うのを聞いた庄松が「また生えにやよいがのう、わしは角があるままのお助けと聞いたがのう」と言っていました。

島根県の妙好人「源左」は、因幡の源左と言われ、よるこぶ名人として敬われました。「源左さんというお方は、何につけても悦びで受ける人で、悦びの名人だったのだいなあ」このような妙好人は、一切のとらわれをはなれ、「護られ・生かされる悦び」を様々な言葉に残してくれました。



光受寺御遠忌法要

お知らせ

学習会 五月から再開。午後六時半より  
金曜茶話 毎週金曜日 午後一時半より